たまシネマ通信　2016年4月1日発行

TAMA CINEMA 通信

TAMA CINEMA FORUM
TAMA映画フォーラム実行委員会　〒206－0025 多摩市永山1－5　ベルブ永山（永山公民館内）
代表：042－337－6661　直通：080－5450－7204　http://www.tamaeiga.org/

特別上映会 3/26 ベルブホール（ベルブ永山 5F 京王永山駅･小田急永山駅下車徒歩約２分）

A FILM ABOUT
COFFEE
ア・フィルム・アバウト・コーヒー

上映スケジュール

① 11:00 — 12:06
② 13:30 — 14:36
③ 16:00 — 17:06
④ 18:30 — 19:36

イベント

♥ あなたとコーヒーの関係がもっと深くなる展示
♥ TAMA CINEMA CAFE マップ
♥ 抽出器具で変わるコーヒーの味わい
～特別試飲会 & レクチャー～
（松崎雄大 氏 <tak beans オーナー > 17:15 ～科学室）

チケット

前売	大人（中学生以上）	1,000円
当日	大人（中学生以上）	1,200円
	子ども（4歳～小学生）	600円

（TAMA 映画フォーラム支援会員、障がい者とその付添者１名は当日 600 円です）

＊全席自由席・各回入替制
＊開場は各回 15 分前
＊上映時間は変更になる場合があります。
＊イベントは無料で参加できます。
［当日 13:00 から受付にてチケット（半券含む）を提示いただいた方に参加券を配布］

企画者からのメッセージ

「おいしいコーヒー」とはなんだろう。 味・質・場所・時間・人……何が左右するのだろう。

サードウェーブと呼ばれるコーヒー界の新たな波の渦中にいるコーヒーに人生をかける人々を追うと、一杯にかける想いと誇りを背負っているように見える。豆の生産過程まで気を配る姿はプロフェッショナルそのものであり、「この人の淹れたコーヒーを飲みたい」と思わずにはいられない。そしてコーヒーを飲む時、生産のことまで考えたことがあるだろうか。

そして本作は海外のコーヒー事情だけではなく、日本にも焦点があてられる。というよりも、海外のコーヒーには日本の存在が大きく影響しているのだ。丁寧なおもてなしの精神やコーヒー器具が取り入れられている様子は、日本人として他人事ではない嬉しさももたらしてくれる。

私が今作で一番押したいポイントは、今は無き大坊珈琲店の店主大坊勝次氏がコーヒーを淹れるシーンだ。静かに丁寧に的確に動く姿は美しく、このシーンを観るだけでも見た甲斐があるような気すらしてしまうだろう。

今回の上映会は、当たり前のようにコーヒーを飲んでいるのに、まったくこだわりのなかった私が本作を観て「もっともっとおいしいコーヒーを飲みたい」と思うようになった。たったそれだけです。

物の価値を見極めて、しっかり対価を払うこと。そして飲むだけではなくその前からコーヒーの時間は始まっていることを教えてくれる。

さあ、おいしいコーヒーを飲もう。（菊池葉月）

Coffee

特別上映会特設ページ http://www.tamaeiga.org/special/afilmaboutcoffee

2月13日（土）特別上映会レポート

お盆の弟

2016年最初の特別上映会として2月13日（土）に『お盆の弟』をベルブホール（多摩市立永山公民館）で4回上映しました。大崎章 監督と脚本を務めた足立紳さんの二人“お盆ブラザーズ”をゲストに迎え、トークや舞台あいさつ、サイン会、打上げと、大変盛り上がった一日でした。

同作の舞台は大崎監督の出身地・群馬県。売れない映画監督で弟のタカシ、がんのため入院していた兄のマサルを軸に、それぞれに苦悩を抱えた大人たちの再生を優しく描いています。弟・タカシを渋川清彦さん、兄・マサルを光石研さんが演じ、岡田浩暉さん、河井青葉さん、渡辺真起子さん、田中要次さんらが共演しています。

大崎章 監督（中央）と足立紳氏（右）

第2回上映後のトークでは、『お盆の弟』の着想から完成までの紆余曲折、海外映画祭での出来事、ヨコハマ映画祭での4冠についてなど、たくさんの内容を伺いました。大崎監督が「自分たちをモデルに主人公や脚本家を描いた」と語ったそのまま、まるで映画のなかの映画監督と脚本家がそのまま舞台に現れたような絶妙なトークの一方、観客からの質問にひとつ一つ丁寧に応じるお二人の姿も印象的でした。

先日の第39回日本アカデミー賞において足立紳さんが『百円の恋』で最優秀脚本賞を受賞。大崎監督は「これからも足立と映画をつくっていきたい」と語っていました。今後も“お盆ブラザーズ”の活躍を楽しみにしたいと思います。（山口渉）

実行委員のおススメ映画コーナー

『自由が丘で』（ホン・サンス監督 / 2014年）

主人公モリは数年前韓国で出会った愛する人を探しに韓国に到着した。

気のいいサンクォンや自由が丘8丁目というカフェの女主人ヨンソンと出あう。愛する人とは中々会えず、ヨンソンと付き合ってしまう日々が描かれる。モリが読んでいる本は時間についてである。時間には実体がないが過去、現在、未来へとその流れに沿って体験する必要があると脳が考え出したというものだ。この映画も自制がバラバラに繋がれている。手紙を読むカットがその合間に10カ所以上挿入されている。

最後のシーンは本来ならば、始まってすぐのあたりに入るべきものである。観客はバラバラなシーンをあれっ？あれっ？と思いながら脳が勝手に時制を繋げている。しかし何故かこの映画はゆったりと流れていて気にならないし、上手く夢かと思わせるようでもある。

モリが花を見ていると恐れるものは何も無いと感じるという。映画もただ、観よ、身をもって感じよといっている。（小野寺綾子）

『ジュラシック・ビースト』（マーク・ポロニア監督 / 2015年）

あの『恐怖！キノコ男』より凄い映画が現れたということで、高円寺で行われた秘密（？）の上映会に行ってまいりました。銀行強盗犯とそれに巻き込まれた女性がとある沼のそばにある山小屋へ逃げる。そこでなぜか古代の恐竜が蘇り……、という作品です。

この映画のすごさは何と言っても恐竜の造形です。着ぐるみとCGで恐竜を表現してますが、全く同じに見えない。サイズも造形も雑すぎる。もう恐竜のサイズが気になって仕方がない。

とは言ってもキノコはさすがに超えていないかと思いました。興味がある人はぜひレンタルで観てください。（吉野治）

実行委員のおススメ映画コーナー

実行委員のおススメ映画を紹介いたします。

『なまいきシャルロット』（クロード・ミレール監督 / 1985 年）

シャルロット 13 歳の夏休み。憂鬱な日々を過ごしていたある日、同い年の天才ピアニスト、クララと偶然知り合う。クララから「付き人になって欲しい」と誘われたシャルロットはその気になってしまう。ベルナデット・ラフォンがセザール賞助演女優賞、シャルロット・ゲンズブールが有望若手女優賞をそれぞれ受賞している。

漠然と何かに苛立っていて、身近な人に八つ当たりしてしまったり、特別やりたいこともなく無駄に過ごしていた 13 歳の頃を思い出しながら、何かの節目に何度も観てしまう映画。振り返ってみれば、あの頃は何をそんなに悩んでいたのか最早分からない。でもそれは特別なことではなく、きっと誰もが通り過ぎてきた時間。そして、とにかくシャルロットが可愛い。月並みな言葉だが、可愛いモノは可愛い。ボーダー T シャツや無造作にまとめたヘアスタイルを真似てみたりしたものだ。　（鈴木美香）

『青い春』（豊田利晃監督 / 2002 年）

春は出会いと別れの季節と言われるが、何かとセンチメンタルになりがちなこの時期、洗練された青春映画を観てますます感傷に浸ってみるというのはいかがだろうか。

『青い春』は高校卒業を控えた不良たちの青春群像劇だ。原作である松本大洋の同名作のストーリーを尊重しつつ、その行間を読み取ったような内容で、とにかくそのセンスには眼福である。

個人的に不良映画といえば「喧嘩と仲間の絆を痛快に描いた話」みたいな「動」のイメージがあったのだが、本作に関しては「静」の不良映画という印象を受けた。繊細な心情描写や死生観を織り込んだようなストーリーがそう思わせたのかもしれない。ありふれた日常に始まり、ラストにかけて物語は急展開を迎える。そのなかで次第に垣間見える登場人物たちの友情や感情の高まりが実に泥臭くそれでいて眩しい。そのバックで流れる THEE MICHELLE GUN ELEPHANT の曲がまた良い。

ほんと（フィクションで観る）青春って素晴らしいですね。私も施錠さえされていなかったら屋上で黄昏る青春を送りたかったものです。　（関果林）

「梅欄芳」

以前、仕事で中国に行った際に映画館で観た映画のお話をします。食事をした後、そのショッピングセンターの最上階にあった映画館にたまたま入ったので、題名や監督名等残念ながら覚えていません。

内容は、実存した京劇の名女形役者「梅欄芳」（1894 年生れ）の話でした。見せ場として、主人公が戦前の日本軍の占領政策に利用されることに抵抗する場面がありましたが、そのなかで、協力を強要する日本軍側から最終的に主人公を助けた日本人の姿も描かれていました。

映画が終了した後、館内でパラパラ拍手も起こり、多くのお客さんは和やかに席を立っていきました。

国と国に色々あっても、日本人をこのように描いてくれる脚本家や監督が中国に居て、上映していることにホットしました。また、何よりそれを普通の中国の人々が、普通に受け止めてくれることがとても嬉しかったです。この映画のお蔭で私も少し気持ちが晴れ、席を立つことができました。（原義治）

～フランス映画は「難民」をどう描くのか～

『ディーパンの闘い』は欧州に押し寄せる難民を難民の視点で描いた映画だ。見ず知らずの難民３人が一つの家族（親子）を装ってフランスに入国。しかし、パリでの居場所は麻薬や発砲事件が頻発する郊外の廃れた公営住宅だ。戦火を逃れてきたはずなのに、ここでも銃撃戦に巻き込まれ再び銃を手にする。今度は新しい「家族」のために。

最近のフランス映画は密航や移民を扱ったものが多い。コンテナに隠れて密航した黒人少年を年老いた靴磨きが匿う『ル・アーヴルの靴磨き』。リストラされた労組委員長が仲間からキリマンジャロ行きの旅行券を贈られるが、それが盗まれるという『キリマンジャロの雪』。犯人はリストラされた同じ職場の移民の青年だった。４年前に公開されたこの２作品では、密航者や移民に真摯に向き合うフランスの心優しき普通の人々が描かれていた。

ところが今や、難民・移民排斥の声がわき起こる。この由々しき事態に、映画はどう対応するのか。

（小林昭一）

5月特別上映会

エール!

5/7(土)
ベルブホール

次回特別上映会は
『エール！』（エリック・ラルティゴ監督）
を上映いたします。お楽しみに！

お知らせコーナー

第26回映画祭TAMA CINEMA FORUM

今年の映画祭は11月19日(土)から11月27(日)までの開催予定です。
現在は映画祭でどんな企画をしようかと案を練っている段階です。
今年の映画祭ではどんな映画が上映されて、どんなゲストが来場するのか。
そして第8回目を迎える日本で一番気の早い(!?)TAMA映画賞はどんな作品・受賞者に贈られるのか。皆さん、どうぞお楽しみに!

映画祭新実行委員を募集 ！

TAMA 映画フォーラム実行委員会は、2016 年 11 月 19 日～ 11 月 27 日に開催予定の第 26 回映画祭 TAMA CINEMA FORUM を一緒に作る実行委員を募集しています！興味のある方、企画・運営などの映画祭の裏側に携わってみませんか？

上映プログラムを企画したい、イベント運営に興味がある、広報・宣伝をやりたい ... など、映画祭づくりの現場には、あなたの希望に沿って力を発揮できる領域がたくさんあります。また、映画好きやイベント好き、地域の方々など、市民が作る映画祭だからこその出会いがあなたを待っています。

この度 5 月 8 日（日）に説明会を開催いたしますので、興味のある方はお申込のうえ、ぜひご参加ください。また、説明会は今後も 5 月に開催を予定しておりますが、日程の合わない方は個別に説明いたしますので、お気軽にご相談ください。

詳細はホームページ
http://www.tamaeiga.org/ をご覧ください。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「観る人、観せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

［支援金寄付　個人会員］
一口1000円

郵便振替番号　00160－5－541123
加入者名　TAMA映画フォーラム実行委員会
（ご不明な点はお問い合わせ下さい）

特典①：映画祭チラシ送付
特典②：映画祭パンフレット贈呈
特典③：特別上映会割引（当日料金が半額！
　　２～８月の間に４～５回開催予定）

※その他特典もご用意する予定です。

シベ超ニュース

先日テレビでリアルな『スキージャンプペア』（２人組でのスキージャンプ）を観ました。『スキージャンプペア』は映画祭のゲストにも来たことのある真島理一郎監督の作品ですが、まさか実際にやる人たちがいるとは思いませんでした。ちなみにシベ超は『スキージャンプペア』とコラボしたことがあります。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ　www.tamaeiga.org
@tamaeiga（最新情報をフォロー）　**www.facebook.com/tamaeiga**（facebookページに「いいね!」で参加）

たまシネマ通信　April 2016　Issued by *TAMA CINEMA FORUM*
Editor in Chief　*O. Yoshino*　Editorial Design　*F. I*　Contributing Editors　*TAMA CINEMA FORUM Staff*
禁無断転載